

ビタミンB6は1934年 Gyöngyi によって皮膚炎予防因子(アピルミン)として発見され、Lepkowsky, Kuhnらによって研究がすすめられた。またビタミンB6のアミノ酸代謝に対する補酵素作用としては1953年頃からソ連の Braumstein 米国の Snell 日本の市原、和田らによってその機構が明らかにされ、最近森野らにはアミノ基転移酵素の一次構造が明らかにされ、その反応機構について論じられている。

[目的] アミノ酸代謝とくにトリプトファン代謝において、ビタミンB6欠乏の指標としてキサンツレニン酸の生成をみる Lepkowsky提唱の XA Index があり、古武らはXAの値糖尿病因子たることを主張し、岡本は膵細胞の分離実験によつて検討を加えている。我々はそのXA生成に因りて肝腎の臓器相関を検討し、XA生成の意義を追求した。

[方法] 肝臓 腎臓 とともに白ネズミを使い、それぞれの連続実験を施行し(大塚、藤本) XAの生成おとの臓器を中心に行うことと検討した。

[結果] ①肝臓では短時間でXAの生成は早く、長期連続を行なうとXAの生成がみられる。②Trp代謝の速度はトリプトファンセロラーゼであり、ビタミンB6欠乏でキヌレニン酸がみられる。③腎臓におけるキサンツレニン酸生成は大きく、種々の酵素活性を調べるとビタミンB6欠乏において、3.5倍のキヌレニンの生成増加がみられ、キサンツレニン酸の方向に代謝は進行する。又ビタミンB6欠乏においてはキヌレニンの初期濃度が大きくさらにはネフロソでのロカ、尿酸値を察して、水や塩をとり、人工透析などの内題も検討を加えていきたい。